文学評論　連載「芹沢文学講話」㊲

芹沢文学研究会 代表　小串信正

最期の連作③「天の書」の創作＝大自然の三部作＝

芹沢光治良は、親様の指導で「神の書」の連作を書き続けました。まず神の三部作を書き、続けて人間の三部作も「一九九一年三月一日」書き上げました。『人間の生命』の最後に「そうだ、僕は地上の太陽だった」と書いています。

平成三年の二月に『人間の生命』の書き下ろし原稿を出版社に渡した後に、太陽から「これで、ようやく待ちに待った、天について、書けるようになったなあ」と言われ、「天で、困るならば……そうだ。大自然の夢―と、したら、どうかな」と促され、「天の書」の**大自然の三部作(1)『大自然の夢』**を書くことになったのです。天の将軍は離れ、大自然と直接に向き合えるようになります。新しく**山本三平が登場**し**「どろうみこふき」**を語り、大自然から「もとはじまりの話」を書かされます。東中野で行われていた芹沢文学愛好会の後半に参加して愛読者と交流しています。伊藤青年に大徳寺昭輝の氏名が与えられます。

ジャックに実相の世界を案内され、「天上の音楽」を聴くようになります。また、ゴルバチョフ大統領のソ連の崩壊も知らされます。それは、**「親神が一九八七年に、人類救済のために、地球上に降りて、実行した」からだ**と知らされます。「実相の世界で、親しい人々が、私が**天上の学校への入学**を祝うから、行こう」とジャックに促されます。「天上の世界」も、「実相の世界」と同じ大気圏のなかにあるとか。**「天上界での、至福な空気に、生涯の友ジャックと二人、恍惚として、我を忘れた」**とも書いています。親さんから「ようく、皆に伝えていく、あんたには、大きな使命がある……光治良さんは、……人が如何にすれば、本当に自分を養い、心を持って、老いることなく、生き続けることが、できるかという道を、しっかりと書くことが、大切であります。」と諭されます。そして、最後に**「百歳ちかい二人の老人の姿が、老醜の影もなく、神々しくさえ感じられた」**と書いて、『大自然の夢』が書き上げられました。

大自然の三部作(2)『天の調べ』は、どうしてか「である体」の文体で書かれます。また**人名がカタカナで書かれます**［注／これは校正で漢字にするつもりであっのか?］。太陽から天の声を聴くように諭されます。親様も天の声や天の夢を語ります。次の天の書には**「光輝く心」**を伝えるように言われます。**天才ジャックからは、イトウ青年のことは考えることはないと忠告されます。**ジャックも唄います。カナエ夫人が聖体を借りて現れ、二人でのパリ遊学［注／日本汽船の白山丸が日立丸になっている?］のことが回想されます。第五章はカナエ夫人の手記として書かれます。第六章は私が回想を書きますが、**どうしてか帰国が一九二九(昭和四)年と記憶違いされています。**天の音楽が聴かれ、**或る朝、親神の使者から、「水わけの命(みこと)」として「神の水」を作り、求める人に与えるように言われます。**十年［注／十年は間違いでは?］の修行で最上段に登り、太陽と語れる神性を得たお祝いに「天の音」を授けられ、**「天の学校(大学)」に入学**するとか……。

『大自然の夢』が出版され、存命の親様から「優しい、穏やかな文体は、まさに、神の心を、表わします。」と褒められます。次女夫婦［野沢朝子夫妻］が、イトウ青年一行とチベットに行きます。**突然にジャックが現れて、天の大学で学ぶようになったとお祝いに来て、一緒に聖歌を合唱します。**家内やナカタニも登場します。ナカタニと若者三人が実相の世界から来て、その一人が「長い歴史の間で、初めて、この地球上に降りられて、人類救済をなさっていることを、ご存じですか」と聞かれたコウジロウ先生は、**「え、親神が、人類救済のために、地上に降りられたって……本当ですか」**と書いています。何故か？　この「神の書」「天の書」は、そのことを広く知らせるために書いているのではないか‼芹沢先生がボケたのか。この『天の調べ』は、96歳で書いているのですが、作家としての限界となっているように感じられます。この後には、連作の讃歌が書かれていますが……。第一一章には、唯一の神が「宇宙の一隅に、小さな美しい緑の星」に気が付き、**「この宇宙で、生物が生きられるのは、この小さい星、地球しかない」として人間を創り「親神は人間一人一人に、わけみたま(魂)を与えて、わが子である証にして、人間はみな、兄弟であることを、示された。」**と書かれています。また、「何もかも、大自然のおかげだ」とも書いています。しかし、この章でも**「親神様が、この地上に、降りられるのでございますか」「親神様が、地上に、降りられることが、あるのでございますか」**とボケたように語ります。しかし、降りられたのは**「一九八七年」で「永久に、記念の年」だと何回も強調**します。「親神の仰せのままに、生きることにして、今年で、十年［注／この十年も間違いでは?］目です。」と回想します。「大自然の調べ」が天地に流れ、**「お前の本『天の調べ』も、終る」**と書かれています。天の使者に「現在の健康をつづけさせて下さい。世界の不幸を身に受けるのも、喜んで堪えま

すが老いた人間としては、健やかであることが、幸せであるばかりでなく、神のおおせの仕事を果し易いのでございます」と願うと、「わかっておる。安心せえ」と言われます。一九九三年一月三日に人類の平安を祈って完結します。一月二十日に「親神が驚くような喜びの便りを、下さるからなあ……と」足元から聞こえたと追記しています。**芹沢光治良は、「親神は、わが子、人類を救済するには、親神が自ら、天から地上に降って、助ける以外にないと、決意された。それが一九八七年の二月中旬のことだった。」と最後まで「一九八七年」を強調**しています。**大自然の三部作(2)**『天の調べ』は、作者の校正が十分になされずに、没後の平成5年7月10日に新潮社から発行されました。

「天の書」の**大自然の三部作(3)**も、書き継がれました。これは、平成五年の正月から書き始められたのです。第一章として書き始めたのが二つあります。これは、二番目の第一章は除いても良かったと思われますが、第四章の途中ですから、後に加筆して書き直しするつもりであったと思われます。勿論、まだ書題も決められていないので、『遺稿』**として活字化し、没後の『芹沢光治良文学館1　命ある日』(平成7年10月10日　新潮社発行)に収録(519～538頁)され公開**されました。天の調べの歌詞が書かれ、庭の日光浴で、太陽から「親神のいさんだ喜びの光を、すなおに浴しなはれ。」と声をかけられます。「平安な幸福を、神から授けられ、これぞ新年の喜びと、感謝している」と書き始め、一高生からの寄宿寮の同室生で親友となった**タチバナ君の独り息子のマサオ君**が元旦の十一時前にチョコレートを手土産に新年の挨拶に来ることが書かれます。タチバナ家は大富豪で熱心なカトリックの信者で、苦学生の芹沢は支援してもらった。マサオ君の自費出版『大きく笑う』の出版記念会の二日前に自動車事故でタチバナ君が急死したこと、夫人が聖女の宮に身をよせたことを回想します。今年の元日に挨拶に来なかったマサオ君に電話したら運転手が風邪で休んで欠礼したとのこと、まだ結婚していないことも知ります。章の最後に**「万一、私のことを気になさる方があっても、どうぞ、ご安心下さい。そして、忘れて下さい。」**という謎的な一文が書かれています。平成五年は「記念すべき、大切な年」と言い、「親神の仰せの修行をし、十二年間〔注／十二年間は八年間では？〕で、ようやく、今年卒業した」**「苦悩にみちた長い歳月。よくも、倒れずに、生きとおせたものだ。」**と、自己の限界を告白しています。芹沢光治良にとって、この連作の創作は苦難に耐えに耐えた歩みで、限界に達していたのだと知られます。この**最期の作は、明らかに筆力が落ち、「実相の世界」のことが殆ど書かれず、天才ジャックも登場しません。**親神が直接に「人類救済をするのや、協力せんか」話しかけますが、**「親神だって……そんな者は、知らん」**と言い出します。しかし、「親神は、わが子、人類を救済するには、親神が自ら、天から地上に降って、助ける以外にないと、決意された。それが一九八七年の二月中旬のことだった。」と**最後まで「一九八七年」を強調**します。神の使者から「汝は、親神に協力するか」と言われると、「ご存じのように、死を待っている身でございます」と喘ぎ、家内が現れると「このまま死ねば、幸いだ」と思います。**「早く息がとまって、娘に世話をかけないですむように、必死に祈ったが、元来神を信じない僕が、祈ったからとて、効果がある筈はないのか――」と書いて絶筆し、平成5年3月23日に96年の生涯を全うしました。**最晩年の連作は全九作と構想されましたが、大自然の三部作(3)は、未完に終わりました。**90歳を過ぎて、毎年一作の長編小説を書き続けたことは偉大なことです。**最期の連作は、大自然の親神に導かれた「神の書」と言われますが、もう一つの、「神に導かれた生涯の大河小説」であるとも言えます。21世紀の人類への遺言だと思います。

天才ジャックは、芹沢光治良の分身としての架空の人物とは思われません。最後の自伝『わが青春』に、「パリ理科大学の研究室のジャック・シャルマンで、班長格は天才ジャックだった」と書き、**墓碑銘に「科学者の畏友ジャックに／大自然の法則と神の存在を」と生前に自筆し刻したのですから、実在の人物だと思われます。**『人間の生命』に書いている平成二年のモーリス・ルッシーから送られて来た速達の長文の手紙があるか調べたいです。また、日記の中に天才ジャックのことが書かれているかも調べなければならないと思っています……。

最期の連作として創作された「神の書」「天の書」に論述された「大自然の親神」や「実相の世界」、そして「人類救済の刻限―一九八七年」等は芹沢光治良の独自の神観ではありますが、私にとってはユダヤ教やキリスト教の親神の一神教と同じで、人間の想像力によって生み出された神観だと思われます。大自然の天は、無意の一元氣であり、人間は有意の不完全な一生物であると、私は哲学的に「天人」を自覚しています。死後の世界は大気圏に無く、天使や天の将軍等も無いと思います。**人類は、知性と感性、そして善意の「人生哲学」によって、地球上に生き抜いていかねばならないと思います。**【令和6(2024)年4月識】